

大学院派遣研修報告書

所属校	新宿区立牛込第一中学校	氏名	伊藤光子
派遣大学院	東京学芸大学	専攻・コース	学校教育専攻・学校教育コース
研究テーマ	「総合的な学習の時間」における教師についての一考察 － 伊那市立伊那小学校の実践事例を通して －		

I 研究の概要

I. はじめに

平成 10 年に新学習指導要領に位置付けられた「総合的な学習の時間」が平成 14 年から全国の小中学校で実践されている。今までになかった新しい授業の幕開けであった。

これからの 21 世紀は、これまで以上に変化の激しい激動の時代になることが予想される。このような社会を子どもたちが困難を乗り越えて自らの判断と行動と責任で生き抜いていく「生きる力」をはぐくむことがねらいとされている。「総合的な学習の時間」は、この「生きる力」を育むことをめざす極めて重要な役割を担う時間と位置付けられているのである。

平成 15 年には「総合的な学習の時間」の実施上の課題等で教員の負担感、具体的な実施内容に関する教員の悩みや取り組みに様々な課題があるとされ平成 15 年 12 月学習指導要領の一部改訂により「総合的な学習の時間」の取り扱いが修正された。様々な課題や困難を乗り越えながらも実践が各学校で定着していることは事実である。このような状況にあって、平成 17 年度に実施された「義務教育に関する意識調査」の「総合的な学習の時間」に対する教師の意識に、改めて様々な現状が露呈されたのである。特に「総合的な学習の時間」に関して「なくしたほうが良い」と回答した教員は小学校で 38.3 % であり、中学校で 57.2 % という結果である。「もっと国語や算数・数学などの教科の学習を重視すべき」と回答した教員は小学校 76.7 % で中学校で 82.0 % である。激動の時代といわれる 21 世紀を生き抜いていく子どもたちの「生きる力」を育む「総合的な学習の時間」を中学校では半数以上の教員が「総合的な学習の時間」をなくしたほうが良いと考えていることは、注目すべき実態である。この回答の裏返しとして「もっと国語や算数・数学などの教科の学習を重視すべき」の数値が高くなっていると考えられるのである。行き詰まっている教師の意識を改革し、教師が主体的に「総合的な学習の時間」の実践に取り組めるようにしていく道を拓かなければならないのである。

戦後、日本は世界有数の経済大国となった。しかし、バブル経済の崩壊後の経済の低迷など社会の状況も変化しているのである。登校拒否やニートの増加など今までにない若者の問題も出てきている、時代が変われば、新しい時代の子どもたちに合わせて教育の在り方も変わっていくべきなのである。「総合的な学習の時間」は、新しい時代にふさわしい新しい学びの時間である。「総合的な学習の時間」の本質に迫りながら教師は、どのように道を拓いて進んで行けばよいのかを考察し明らかにしたいと考えたのである。

2. 研究の目的と研究方法

本研究は、「総合的な学習の時間」を充実させ、豊かに展開していくために、その授業を創り出していく教師に視点を当てたのである。「総合的な学習の時間」を創造する教師の在り方を明らかにすることで、行き詰まっている「総合的な学習の時間」の教師の意識と現状を未来を担う子どもたちのために少しでも改善していかなければならないのである。「総合的な学習の時間」の創設から現在の状況に至るまでの経過を実践事例を基に書いている。まず、学習指導要領により「総合的な学習の時間」が創設された当初、実際に学校現場ではどのような実践がどのように取り組まれていたのか実践の事実を取り上げて書いているのである。これは、東京都 S 区の小学校の校内研修会のテーマを通して「総合的な学習の時間」にどのようなテーマ

でどのくらいの期間取り組んだのか明らかにしているのである。また、東京都K区の指定研究協力校の実践を通して教師は「総合的な学習の時間」の創設期に、どのように試行錯誤し取り組んでいたのかを当時の研究紀要の記述から分析しているのである。続いて、平成17年に実施された義務教育における基礎調査の「総合的な学習の時間」の教師の意識調査を取り上げている「総合的な学習の時間」が実施されてから数年を経て教師は、どのように考えているかを明らかにしているのである。「総合的な学習の時間」の実践に取り組む始めてからまだ間もないが長野県伊那市立伊那小学校では、20年以上にもわたって総合学習・総合活動に取り組んでいる。本当の教育とは何かという本質を求めて20数年にわたって総合学習の実践に取り組んでいる。この伊那市立伊那小学校に在職した教師が、どのようなことを大切にして実践に取り組まれていたのかを明らかにしていくこととする。「総合的な学習の時間」を実際に動かすのは教師だからである。

教師がどのようなことを考え、どのように選択し決断し行動しているのか。自分の成長をどう振り返っているのかをそれぞれの教師のそれぞれのあゆみから学ぶことは重要な意味があると考えたのである。

この研究の対象である4人の教師は長野県伊那市立伊那小学校で在職していた教師と現在在職している教師で伊那小学校で在籍し実践に取り組んだという共通の経験をもっている。伊那市立伊那小学校は、本当の教育とは何かを教師が問い直すなかで総合学習を生み出した。長年にわたって総合学習の実践が続けられて来ているのである。「総合的な学習の時間」が予め、設定されて取り組んでいる私達に総合学習の本質が明らかにしてくれるのではないだろうか。

「総合学習」という視点に基づいて「総合学習で大切なことは何か」を明らかにするために、4人の先生にインタビューを依頼した。インタビューから「総合的な学習の時間」を実践する根幹となるべき事柄が明示された。

(1) 「子ども観」の転換による教育実践

伊那小学校の教育の原理は子ども観にある。子どもは自ら求め、追究しようとする能動的な学習者である。こうした子ども観に立って授業を展開するとき、自ずから総合学習となっていくのである。子どもの内にある求めによって授業を実践しているのである。この子ども観の共通理解を基に伊那小学校すべての教育実践が取り組まれている。初めからこのような子ども観で伊那小学校に着任される先生もいるが、大抵は、伊那小の前に何校か教師の実践を積み重ねていて、子どもは教え込むものという反対の教育観をもっている人もいる。教育実践に熱心に取り組んで来た人ほど、反発が大きいようである。しかし、伊那小学校では、反発していた教師の子ども観が驚くべき速さで転換されていくのである。ここに伊那小学校に着任した教師の大きな学びがある。

この学び（観の転換）がなければ伊那小学校における、すべてが一貫して構成されている総合学習の実践は難しいといえる。この子ども観の転換は、今までの自分の子ども観を翻すものであるから人生のターニングポイントとなる大きな出来事である。今までの自分の教育実践を否定することにつながるので、自問自答の苦しい日々が続くのである。

苦しい日々の中で、生き生きと活動する子どもの姿に接したり、子どもと共に体験し追究していく中や、先輩の先生方などに学年研を中心とした研究会で助言や支援をしてもらうことを通して問い続けていく中で、子ども観が転換するのである。どの教師も子ども観の「観」の転換を経験した教師は伊那小で取り組まれていることの全てに合点がいったと話している。伊那小学校ではそれぞれの教師の原理的な把握が「観」の転換過程を通して行われていくようである。総合学習・総合活動を通して具体的力動的に子どもを見取っている。「総合的な学習の時間」を実践していくには、こうした意識の変革が不可欠である。

まず、意識の変革が原点であることを共通理解することである。「子どもと共に総合的な学習の時間」に取り組む、実践しながら自己への問いを繰り返しながら「観」の転換が徐々に起きていくのである。

(2) 総合学習を創造する教師

教師は、「はじめに子どもありき」の子ども観に立って児童・生徒と共に「総合的な学習の

時間」を創造するということである。生徒の思いや願いを引き出しながら教師自身も願いをもって共に活動していく時間である。総合的な学習時間には定められた形式がない。この題材でこのように取り組んでいくというマニュアルもない。一つ一つの取り組みがすべて違う。それは、目の前の子どもと共に常に新しい題材の中で学んでいく創造的な授業であるからである。昨年取り組んだ内容は、昨年の子どもたちの事実に基づいた活動であり、今年の子どもに昨年と同じやり方で活動するという事は考えられない。子どもの姿、事実に基づいた活動でなければならない。教師は子どもの内にある思いや願いに常に光りを当てて見取り、それを引き出して具現したり、子どもの微妙な心の変化にもすぐに気づける豊かな感性などを、教師の内に育てていかなければならない。今、総合学習に求められているのは、この教師の力量だといえる。伊那小学校で総合学習が試行されたとき、当時の酒井校長の強力な指導力の下で、最初は反発していた教師が、子どもの変容を活動の中で実感することを通して教師自身が変容し積極的に総合学習に取り組めるようになった。学ぶということは変わることである。

教師は、学びの成長を続けなければならない。常に、子どもたちの声が段々教師に聞こえてくるように子どもの先を歩いていなければならない。子どもの先を歩くには、題材の検討や素材研究を十分するということであり、子どもの事実を見取りながらこれからのことを予測して手だてをいくつも準備しておくということである。

① 校内研修会で教師がお互いに学び合う

こうした優れた力量のある教師への成長は校内研修会にある。

「はじめに子どもありき」の子ども観に立ったねらいや授業指導案の検討、子どもの見取り、授業記録の作成と整備、授業の記録の分析と課題の提示はどうすればよいのかなど授業研究のスタイルを全員の教師で検討して打ち出し根底にある子ども観をみていくことが大切である。

「総合的な学習の時間」が創設された当時は、東京都S区の小学校のように、どこの学校においても研修テーマに取り上げられて研修されたが、2、3年後には他のテーマに取り組みされている実態があった。やはり、継続して取り組まれていかなければもっと具体的な成果は現れてこないであろう。

教師の意識調査における「やらないほうがいい」と回答した教師は、伊那小に新しく着任した先生が抱く思いと共通することがあるのだろうか。系統的な教科指導を熱心に取り組まれていた教師ほど総合的な学習の時間を疑問に思うことがあると言われる。

伊那小学校においては、総合学習・活動に反発をしていた先生方も子どもの姿や同僚教師の支援などにより、「はじめに子どもありき」の子ども観にたって総合学習にまい進されていくようである。しかし、一般校においては、創設されてから数年しか経っていない総合学習の時間の活動の中で生徒の姿などから教師の変容があるかと言えばとても難しい状況がある。教師の教育的な力量が高まらなければ総合的な学習の時間は充実し豊かなものと成り得ない。教師の意識調査における中学校教員の現状はとても厳しいものである。

② 専門家との共同研究

校内研修会の在り方も変革していく必要がある。「総合的な学習の時間」についての専門家や実践家との共同研究に継続して取り組むということである。予算的な事もあるかもしれないが、マンネリ化して活気のない校内研修会を変革していくには必ず必要なことである。専門家や実践家の支援を受けて教師が子どもと共に体全体で感じたり、自分たちの実践を具体的に省察して、新たな取り組みを生み出していく可能性がある。教師一人一人が研究者として歩み始める布石ともなる。

③ 個人研究の取り組み

伊那小学校では、年度の終わりに学年研や公開学習指導研究会を通して、教師一人一人が研究し学んだことを個人研究としてまとめている。自分の研究を振り返り省察していくとても良い機会となっているのである。次年度への新たな課題が見えてきて、つぎへの取り組みになる研究の見通しをもつことができる。個人の研究を冊子にまとめて、お互いの研究を更に学び合うことができるのである。更に自分の研究が発展するのである。このように「総合的な学習の時間」における個人研究に取り組むことは教師の力量を高めることにつながるのである。

④ 人間としての成長

伊那小学校の昭和26年の教育の重点の教育者の在り方として、教師は教育の技術者となる前にまず人間でなければならない。豊かな教養、広い趣味をもった明るい気品のある人間でありたい。」とある。「教師である前に人間でなければならない。」人間であることが前提になっている。優れた人格者として成長し続け常に自分を変革していける人は、教師になれる。

伊那小学校では、唐木順三の著書を読み合わせでずっと読み継いできている。

「真事」「真言」「誠」の学校目標の精神はとぎれることなく先生方の実践の振り返りの中にも生きていたのである。精神面の大きな支えになっている。伊那小の教育実践には哲学がある。人間としての生き方を自分の実践の振り返りを通して常に考えさせられ新たな自分へと成長しているのである。

授業の学習指導案を作成する時に、その指導案に自分をさらけ出すことは、勇気のいることである。自分の内にあるものをも具現化したものが学習指導案である。伊那小学校の学年研究で大槻武治は、授業指導案にその教師の授業観・子ども観・教師の生き方観という骨格の所を出さなければ検討してくれなかったのである。学習指導案はそのように全精力を傾けて作成されるべきなのである。大槻武治には妥協を許さない徹底した厳しさがあるのである。教師は生半可な気持ちでは取り組めない。このように取り組んでこそ子供が見えてくるのである。まさに真剣そのものである。「子どもから学ぶ。」教育の根源である。そのために教師自身が研鑽し、人間として高まらなければ子どもの内にあるものを引き出して育てようとしても気付くことができない。子どもの生きようとする力を太くすることができないのである。人間として成長する教師であることが「総合的な学習の時間」という新しい学習の時間を創造していくことができるのである。

そのためには、生徒の事実に基づいた今までにない新しい校内研究のあり方、生徒の見取りの方法や学習指導案の書き方にいたるまで、各学校の全員の教員で共同して話し合い、生み出していくことが必要である。こうした「総合的な学習の時間」の研究体制の中の研究を教師が体で実践し取り組む過程に本当の教育の姿があるのではないだろうか。

「総合的な学習の時間」は人間の根本となる生きる力を育成することがねらいである。この重みを受け止めて「総合的な学習の時間」を常に創造していける教師と成長していくことがこれからの新しい時代の教師に不可欠なことである。

Ⅱ 学校等における研修成果の活用計画

(1) 「総合的な学習の時間」を核とした校内研修会の実施

① 研究者及び実践者との共同研究

「総合的な学習の時間」について、各教員が自らの子ども観、教育観を問いながら専門性を身に付ける事が基盤となる。この時間のねらいを再確認し、教師の取り組むべき事柄を実践しながら学び力量を高めることが必要である。そのためには、研究者や実践者の専門的な支援を得ながら「総合的な学習の時間」における教師の学びを研修会を通して共同で追究していく事が大切である。一人一人の教員の全員が子どもたちのために学び合えるようにする。

② 「総合的な学習の時間」のカリキュラムを作成する。

他の教科学習や学校行事との関連をどのように図れば一貫性をもって実践に取り組んでいけるかを明らかにする。

③ 共同で学び合う授業研究

共同研究していくために全員が1回は研究授業を実践し学び合えるようにする。「総合的な学習の時間」だけでなく、関連した教科指導や学校行事の授業の実践。

ア 指導案の作成・・・子どもが主体となる指導案の作成を研究していく。

イ 見取りと支援・・・子どもをどう見取るか共同して学び合い支援の方法を探る。

ウ 評価・・・教師自身が1年間の研究を振り返り実践をまとめる。できれば冊子とする。

(2) 地域との連携を図る。

「総合的な学習の時間」の成果を発表会等で地域に発表する。「総合的な学習の時間」のゲストティーチャーとして授業に参加して支援して頂く機会を多く設定する。

大学院派遣研修成果活用状況

所 属 校	新宿区立牛込第一中学校	氏 名	伊藤 光子
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	学校教育専攻学校教育コース
研究主題	「総合的な学習の時間」における教師についての一考察 ー長野県伊那市立伊那小学校の実践を事例としてー		
1	平成18年度 道徳授業地区公開講座 総合学習・道徳 合科授業実践（平成18年6月19日実施）		
所 属 校	1. テーマ 生命の尊重 項目3ー(2) 井伏鱒二原作 映画「黒い雨」から考える 2. 場所 体育館 3. ゲストティーチャー (新宿区子どもの生き方パートナー乙武洋匡さんと地域の9名の方々) 4. ねらい 平和都市新宿区の生徒として平和について改めて考えさせる事を通して、生命を尊重する態度を 伸長して、互いに人間としてかけがえのない生命が与えられていることに喜びと感謝の念をもたせ の る。更に、人間としてどう生きれば良いのか自覚をもたせる。地域の様々な分野で活躍されている 成 果 方との話し合いを通して、新たな物の見方や考え方があることを知り、これからの自分の生き方に 果 生かしていけるようにすると共に「総合的な学習の時間」における研究テーマの課題解決に生かし 活 用 ていけるようにする。		
	5. 形式 体育館で、10班に分かれ、ゲストティーチャーにお一人ずつつ入っていただき語り合う。 6. 授業計画 ・ 1時間目（総合学習・道徳）映画「黒い雨」今村昌平監督（東北新社製作）を見ての感想、 みんなと語り合いたい事をまとめる。 ・ 2時間目（総合学習・道徳） 班毎に語り合いたいテーマについて話し合いまとめる。 ・ 3時間目（道徳） NHKビデオ「君は広島を見たか」原子爆弾について知る。 ・ 4時間目 本時（総合学習・道徳）自分の考えを発表したり、各班毎にゲストティーチャー や友達の考えや意見を聞くことを通して平和の大切さや生命の尊さを考える。		
2	新宿区中学校「総合的な学習部会」研修会 平成18年7月31日 実践報告		
委 員 会	平成17年11月4日に自校で実践した校内研修での「総合的な学習の時間」の研究授業につい て指導計画や授業指導案をもとに部員の先生方に実践報告をする。		
・ 研 修 会	研究授業「インタビューの方法を学ぶ」では、乙武洋匡さんにゲストティーチャーに来ていただ き、インタビューを通して、コミュニケーションを大切にしながら自分の研究を進めていけるよ うに授業を実践した。インターネットや文献だけの情報で自分の課題を解決したかのようにまと めるようとする生徒の現状を解消していく必要に迫られたからである。実践報告後の協議会から 「総合的な学習の時間」の授業研究が学校の校内研修会等で実施されることは極めて少ない現状が であることが分かった。「総合的な学習の時間」における教師の力量を高めていくためにも「総合的 な学習の時間」の授業研究が重要であること、「総合的な学習の時間」を生徒が主体的に有意義に 研究を進められるようにするには、教師の実践的指導力が高められていかなければならないこと などを再確認した。また、「総合的な学習の時間」における教師の支援の具体的な方法などについ て意見交換し学び合える研修会となった。		
成 果 活 用			

平成18年6月19日 5. 6校時 総合学習・道徳授業 合科授業

テーマ：生命の尊重

3 自分の考えを発表したり、各班毎にゲストティーチャーや友達の考えや意見を聞くことを通して平和の大切さや生命の尊さについて考える。

※「総合的な学習の時間」に生かしたい視点

ゲストティーチャーのお話を聞き自分が今まで気付かなかった見方や考え方のあることを発見する。

成果を生かした研究授業等

	生徒の活動	教師の支援
導入 5分	○授業の概要について ○ゲストティーチャーの紹介	○自分の考えや意見を持ちゲストティーチャーと語り合えるように意識を高める
展開 60分	<p><進行を各グループの代表に移行する></p> <p>○映画「黒い雨」や戦争に対する思いを発表しながら自己紹介する。</p> <p>○お互いに意見交換 (ゲストティーチャーに支援して頂く)</p> <p>○ゲストティーチャーのお話 各グループ毎にゲストティーチャーが生徒の実態に合わせて考えられたそれぞれのテーマでお話をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦争体験 ・核の脅威と世界の現在の情勢 ・人命救助の現場 ・人権の尊重と思いやり ・一トン爆弾を取材した報告を通しての戦争の悲惨さ ・人として生きていくこと等 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の主体的な活動を生かす ・生徒が自分の思いや意見を事前にワークシートにまとめておくようにする。 ・友達の思いや意見を良く聞き、疑問点は質問したり、率直に意見交換ができるようにする。 ・ゲストティーチャーのお話を聞きながら自分が今まで気付かなかった見方や考え方のあることを発見できるように助言する。 <p>※総合的な学習の時間に生かしたい視点 ゲストティーチャーの生き方から生み出される思いに触れながら学んでいく過程を大切にする。 人の生き方から学ぶことの大切さに生徒が気付けるようにする。</p>
まとめ 10分	○各グループで話し合われた内容とゲストティーチャーのお話を代表者が発表する。 ○質疑応答	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取りメモを生かしてワークシートにまとめられるようにする。 ・生徒が新たな課題をもてるようにする。

4 今後の活用計画

- ・「総合的な学習の時間」についての研究に継続して取り組み、授業実践しながら、課題解決を通して生徒が自らが生きていく力を自分で高めていけるような支援の方法を探る。
- ・大学院で学んだ研究成果を校内研修会や地域での研修会で発表し、「総合的な学習の時間」を豊かに充実する授業づくりに取り組んでもらえるようにする。
- ・「総合的な学習の時間」の先進校での実践についての研究を機会在る毎に随時発表していくようにする。
- ・「総合的な学習の時間」における教師の実践的指導力を授業実践を通して高め提案していく。
- ・大学院派遣研修成果を生かした授業実践を機会ある折りに発表していく。